
2. バウム・テストから見た統合失調症患者の社会適応について ～デイ・ケアへの参加に焦点を当てて～

川口病院 心理室 西村 玲有 齋藤 慶子

はじめに

現在精神科医療においては、「入院医療中心から地域生活中心へ」という厚生労働省の基本理念に基づき、地域で精神障害者を支える機能が求められるようになってきている。当医療法人にもデイ・ケア、訪問看護、作業療法など様々な社会資源があり、外来患者を地域で支える取り組みがなされている。

特に川口病院では統合失調症患者が多く、デイ・ケアや訪問看護などの社会資源を利用する患者の多くも統合失調症患者である。しかしその中でも、症状の不安定さや元々の社会適応の難しさから、その社会資源に適応し治療的に利用すること自体が難しい患者がおり、彼らをいかにサポートするかが課題になっている状態である。

研究目的

そこで本研究では、統合失調症患者の社会資源への安定した参加について、心理的な観点から検討することを目的とする。具体的には、社会資源への参加が安定している者と不安定な者では、どのような点が異なり、それぞれにどういったサポートが必要かを検討する。また本研究では、社会資源の一つとしてデイ・ケアに焦点を当てて研究を行うこととする。これは精神科病院においてデイ・ケアが地域生活におけるファーストステップとなりえると考えたためである。

研究方法

<対象者>

デイ・ケア通所歴のある統合失調症患者

のうち、過去にバウム・テストを含む心理検査を行った者を対象とした。本研究ではランダムに8名をピックアップした。その際、週4日以上決められた日数定期的にデイ・ケアに通所しているものを安定群とし、遅刻や欠席が多く通所が不安定なものを不安定群とした。

<指標>

対象者の心理的特徴を把握するための指標として、本研究ではバウム・テストを用いた。バウム・テストは施行に言語を用いず負担が少ないという特徴があり、統合失調症患者の精神的なエネルギー、感情状態、対人関係のあり方などを総合的に把握することが可能な心理検査と考えたためである。

実施・結果

対象者8名のうち、安定群は5名、不安定群は3名であった。その両群のバウム・テストを比較検討した。今回は安定群3名、不安定群3名の結果を掲載する。

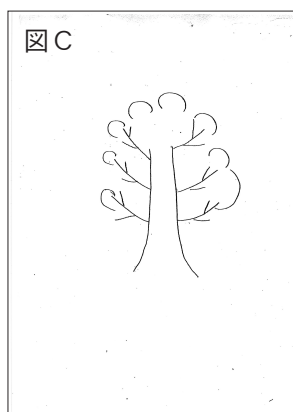
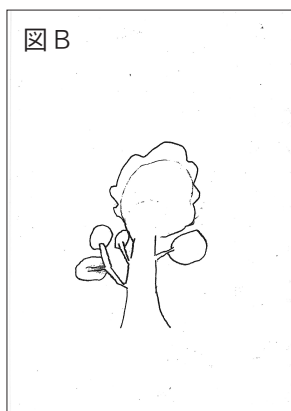
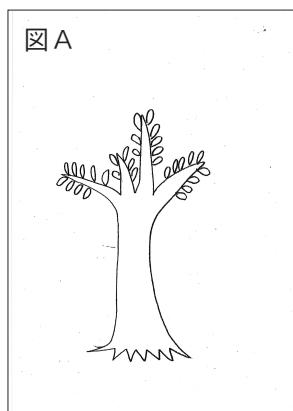
<安定群>

安定群の3名（Aさん、Bさん、Cさん）簡単な病歴、デイ・ケア通所の状態、バウム・テストの結果は以下の通りであった。

図AはAさんのバウム・テストの結果である。32歳女性で、19歳発症、平成21年の退院後からデイ・ケア利用を開始し、現在は週5日間定期的に通所している。

図BはBさんのバウム・テストの結果である。37歳男性で、15歳発症、平成20年の退院後からデイ・ケア利用を開始し、現在は週4日間定期的にデイ・ケアに通所している。

図CはCさんのバウム・テストの結果である。46歳女性で、15歳発症、平成19年の退院後からデイ・ケアを利用し、現在は週4日間定期的に通所している。



これら安定群のバウムテストは、サイズは用紙内に収まるかやや小さく、枝葉も少なめで一定程度で伸びが止まっているものが多く見られた。全体的な印象としては、まとまりがあるが簡素な印象であった。

<不安定群>

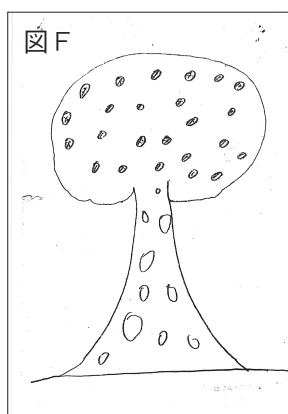
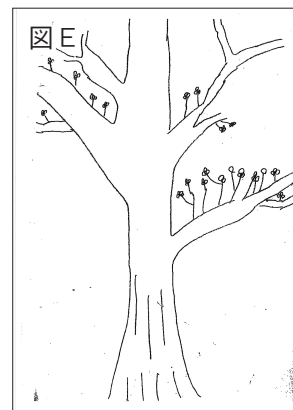
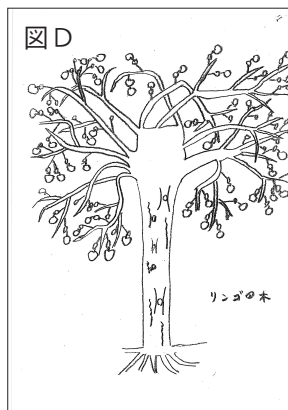
不安定群（Dさん、Eさん、Fさん）の簡単な病歴、デイ・ケア通所の状態、バウム・テストの結果は以下の通りであった。

図DはDさんのバウム・テストの結果である。51歳男性で、18歳発症、当院転院後は外来治療、デイ・ケア、訪問看護を利用している。デイ・ケアは週1～2回通っており、時々欠席が見られる。

図EはEさんのバウム・テストの結果である。38歳男性で、15歳発症、直近では平成19年に入院し、退院後デイ・ケア通所と

なるが、通所しない日が多く、中断となっている。

図FはFさんのバウム・テストの結果である。44歳男性、20歳発症、平成22年当院転院後からデイ・ケアを開始していたが、平成23年頃から欠席が増え（週2回利用予定）、回数が不安定になっている。



これら不安定群のバウム・テストは、サイズは用紙いっぱいにはみ出るほど大きく、枝葉は上や横に伸び、その数も多いものであった。全体的な印象としてはまとまりに欠けるものの、エネルギーがあるものが多く見られた。

考察

<安定群>

安定群のバウム・テストのサイズは標準～小さめであった。サイズはその人と環境との関係のあり方やエネルギーの程度を反映する指標となっている。このことから安定群は、今ある環境に収まることができるが、精神的エネルギーがやや低く、自己価

値観が低下している状態であると考えられる。また枝葉はやや少なく、伸びが一定程度で止まっていた。枝葉はその人の目標や外界への興味関心、自尊心などを表すとされている。このことから、安定群は外界への関心や積極的な態度がやや乏しいことが示唆されるだろう。

これらから、デイ・ケアへの通所が安定している者は、精神的なエネルギーがやや低く、今ある環境に収まることができているが、外界への関心や積極的な態度が乏しい一群である可能性が考えられる。つまりデイ・ケアに安定していることはできるが、興味の乏しさや活力のなさが問題になっている一群と言えるだろう。

<不安定群>

デイ・ケアへの通所が不安定なものは、サイズが大きく、用紙からはみ出しているものも見られた。この結果から不安定群は、精神的なエネルギーが高く、自己価値観を高く維持しているが、今ある環境に収まることが難しい状態であると考えられる。また枝葉は広がりが大きく、目標や興味が幅広いこと、自分以外のものに好奇心があり、自尊心が高い状態であると考えられる。

これらからデイ・ケア通所が不安定な患者は、精神的なエネルギーがあり、自己価値観を高く持ちながら、外界に対して積極的に関心を持ち関わっているという特徴を有していると思われる。しかしその反面気分が高揚しすぎてしまったり、自分ができるという思いが強かったり、関心が外に向き過ぎてしまうことで、安定して環境に留まることができないでいるのではないだろうか。

<総合考察>

以上の考察から、両群の治療的介入について検討した。不安定群の課題は、エネルギーの強さを適応的な形で活かしながら、外界への興味を維持していくことと思われる。そのためには、デイ・ケア内でリーダー的役割を任せたり、活動的なプログラムを

取り入れることが有用と思われる。また安定群は、外界への興味や関心を刺激することが課題になるだろう。そのために、まずは本人の興味があるものから活動に取り入れたり、何気ない日常的やりとりを心がけるところから始めることが良いのではないだろうか。

おわりに

本研究ではデイ・ケアの安定群と不安定群における心理的特徴と治療的介入について検討した。その結果、安定群不安定群ともにそれぞれの心理的特徴があり、治療的な課題や介入についても異なることが示唆された。

また同時に、バウム・テストが、統合失調症患者の心理的特徴や社会生活における課題について検討するために有用な指標であることも示されたと考える。

統合失調症患者を地域で支える取り組みにおいては、本人の病識のなさ、思考障害や現実検討の低下によるまとまりのない行動やコミュニケーションの成立しにくさ、陰性症状など、統合失調症に特有の症状による難しさがある。そして症状やその背景も人によって様々である。そのため治療的な介入においては、画一的な対処ではなく、特有の症状や心理的特徴を見立て、それに沿って対応していくことが必要になってくるだろう。本研究がそのための一助となればと考えている。

ただし本研究はサンプル数も少なく、今後対象者を増やしてより詳細に検討していくことが必要であると考えられる。

参考文献

鍋田恭孝『バウムテスト（樹木画）の読み方—その効用と限界 臨床心理学3』金剛出版 2003
高橋雅春・高橋依子『樹木画テスト』文教書院 1986